

ローマ字に関する一考察

—ローマ字を含む語を中心に—

修 徳 健

はじめに

ローマ字語は日本語の中で、普通省略語の組み合わせによる複合語の一種として考えられるが、その例として、CD、NHK、WCなどが挙げられる。だが、ローマ字語は、複合語または複合の様相を呈する語の構成要素の一部として用いられる場合もある。例えば、ABC兵器、B細胞、FA制などがその例である。

本稿では、このようなローマ字形態素が含まれる語について、『コンサイスABC略語辞典』^①に収録されている同種の語をもとに、(1)命名の問題、(2)語の構成要素の一部として用いられる漢字要素とカタカナ語の形態と特徴などを中心に考察し、その実態と特徴を明らかにしたいと思う。

一. 命名の問題

先行研究では、ローマ字語を省略語の一種として単独で考察するものが多かった。それは〈特集「略語」〉(『日本語学』1988, 10, vol. 7 明治書院)と〈特集「ヨコ文字語総点検」〉(『言語』昭和60年9月)などに挙げられた関係の論文によっても確認できるところである。NTT、KDD、JAL、UN、UNICEFのような略語については、その特徴はすでにある程度明らかにされてきた。しかし、PIE症候群やPSPテスト、Tフォーメーションのような、文字表記の面において複合の様相を呈する語については、今まであまり注目されなかったと言えよう。芳賀綾氏は「プロ野球のローマ字語」(『言語』昭和60年9月)という論文の中で「DH制」という語をローマ字語の一例として挙げている。また石綿敏雄氏は「情報化社会の突出部」(『言語』昭和60年9月)という論文の中で「OA化」という語を同じくローマ字語の例として扱っていた。全体として、ローマ字を含む語もローマ字語と同様に、省略の一種として考察されるのが今までの研究の主流であったと言えよう。

このほか、ローマ字語を外來語と、またそれを含む語を複合語としてとらえる説もあ

るが、その当否については、実際の例などを詳しく分析した上で検討していく必要があると思う。

まず、ローマ字語を外来語扱いすることの可否については、従来、様々に議論されてきたが、未だに定論を見ていない。森岡健二氏は、「略語の条件」という論文（『日本語学』1988, 10, VOL・7 明治書院）の中で、これについて次のように述べている。

「最近とみに増えてきた OPEC, NATO, OECD などの略語は、外来語と見るべきか、外国語と見るべきか、新聞などで括弧内にその訳語が入れているものは、外国語扱いなのであろうが、改善の余地がないかどうか、記憶の負担に堪えないだけに問題に思う。」

また、それを反映するかのようになり、月刊『言語』は昭和63年9月号の特集のタイトルを「ヨコ文字語 総点検」（西洋語を日本語化したカタカナ語は除く）として、ローマ字語に関する研究論文を掲載した。

実際の例を見ると、例えばNHK(NIPPONHOUSOUKYOUKAI), KDD(KOKUSAI DENSHIN DENWA) などのようにローマ字表記の日本語の頭文字を取ってできたものもあれば、JR（日本鉄道→JAPAN RAILWAY）やJAL（日本航空→JAPAN AIR LINE）などのように翻訳の英語の頭文字を取ってできたものもある。また、NTT(NIPPON TELEGRAM TELEPHONE) のような日本語と英語との混合によって造られたものもあるし、この種の語の全体の多くを占めると見られるCD, FBI, LD-ROM のような所謂英語の縮略語もある。これらを見れば、そのいずれもローマ字という共通した文字表記の手段によって書かれているが、文字表記の形態を除いて実際の内容に限ってみれば、外来要素が含まれていないものもあるように、かなり複雑多様であることが容易に分かるであろう。これに、現在外来語が原則的にカタカナで表記されることを併せ考えると、ローマ字語を外来語として見るのは、少し妥当性を欠くのではないかと思う。

本稿は上記のようなローマ字形態素^③を含む語を考察対象とするが、ここに、その例として「LH テープ」(low-noise high-output tape), K 点 (Kritischer Punkt), FM 放送 (frequency-modulation broadcasting), U ターン (U-turn) などが挙げられるが、これをめぐって先の語種の問題とは別に議論がされているが、それはこの種の語が文字表記の形態上、複合的様相を呈することにより、その全体が複合語としてとらえられるからである。

日本語の複合語の定義については、『国語学研究事典』によれば、「…本来、単独の用法を持つ二つ以上の単語が結合して新たに一語としての意味・機能をもつに至ったも

の。」とされ、また『国語学大辞典』は、「単語が、その構成より見て、二つ以上の語彙的意味を持つ部分（形態素）に分析し得ると認められるとき、これを合成語と言ひ、…この合成語のことを複合語と称する場合もある。」としている。ところで、複合語として成り立つには少なくとも次の三つの条件が必要であると考えられる。(ア)構造的さらに小さい部分に分けられる。(イ)各構成要素はそれぞれ独立した語彙的意味を持つ。(ウ)複合されたものは、全体として一つの新しい意味を表す。これを踏まえて考えると、ローマ字を含む語は、基本的に次の三種類に分けられる。

A 上述の三条件に合致し、複合語として認めてもよいもの。例えば、

「LL 教室」「PL 教団」「WW 加工」「PT ボード」などがその例である。この種のものは、前項要素として見られる「LL」、「PL」、「WW」、「PT」などが原語において、それぞれ [language Laboratory]、[Perfect Liberty]、[wash-and-wear]、[patrol torpedo] などのままとった語句の省略形で、その意味は、周知のものでなくても、まず独立性を持つものとして認められるものである。また、後項要素となるものは、「教室」や「ボード」のような語種の違いはあるが、意味の独立性については、何ら疑う余地のないものである。

B 文字表記の形態では、複合の様相を呈するが、語構成面では、構成要素の一部と見られるローマ字語に意味上の独立性が認めにくいもの。例えば、

IQ 制 [import quota system]

LD 法 [Line-Donawitz process]

POS 端末 [point-of-sale terminal]

DK グループ [don't know group]

これらの語のローマ字形態素の部分は、原語のある語句の部分部分の頭文字による省略であって、単独では当該語句の明確な意味を表すのが困難だとされる。また、漢字要素もカタカナ語の部分も、同一語句の一部に対する翻訳または書き換えによるもので、単独で意味をなすものと、「制」や「式」などのような接尾辞で、単独では意味をなさないものがある。本来、一つのローマ字略語になるはずのものが、ローマ字と別の異なる文字によって書き分けられているため、二つの異種類の語の複合のように見えるものである。

C 語の形態においてはBと同じだが、ローマ字形態素の部分は略語としてではなく、字形を表すものとして用いられ、意味をなさないもの。当然、複合語とは認められない。例えば、U ターン [U-turn]

V ネック [V-shaped neck]

H 型鋼 [H-shaped steel]

のようなものがその例である。

以上、ローマ字を含む語の命名の問題について、語種と語構成（構成要素間の意味的關係などについては、今回の考察から除外された）の二つの異なる視点から外来語または複合語としての認定の当否について考察した。その結果、この種の語は、その形態の複雑さに反映しているように、外来語または複合語として見られるには、無理があることが分かるであろう。巨視的に見た場合、これらの語はローマ字語と考えてよいであろうが、詳細に考察すると、外来語または複合語としてとらえるのは穏当なこととは言えないであろう。本稿では慎重を期して、「ローマ字を含む語」という稍簡潔でない呼称を用いて、その実態を分析していきたい。

二. 「ローマ字を含む語」の形態とその特徴

『コンサイス ABC 略語辞典』（三省堂 1993年）の収録語数は全部で 4500 語で、その内、ローマ字を語の構成成分（前項成分のみ）の一部として用いている「ローマ字を含む語」は、289語（延べ語数、以下同じ）^④ 数えられる。前項成分のローマ字に対し、後項成分には漢語、和語、外来語（カタカナ表記）、混種語などが用いられ、語種の多様性が見られる。この中で、最も多いのは漢語（接尾辞的なものを含める 以下同じ）付きのもので、168語であった。ついで外来語（カタカナ表記）付きのもの98語であった。和語と混種語はそれぞれ6語と5語であった。これらの語は、語種別に次のように整理できる。^⑤

I 漢語付きのもの（括弧の数字は用例数）

a 漢字一字で、接尾辞的なもの

A 判(9) AE 剤 API 度 CO 法(4) FA 制(3) K 点 MP 盤 MTS 系
RP 画 P 点 PM 制(2)

b 一字漢語

ABU 賞 D 体(2) FEC 賞(2) GM 管(3) H 型鋼(2) HR 図 I/O 表 L
波(3) LB 膜 LV 値 NR 数 Q 熱 W 杯 X 軸 X 脚 X 線

c 二字漢語

AA 会議 ABC 兵器(4) ABCD 体制 ABS 樹脂 AIDCA の法則(2) AM
放送(2) AND 回路(3) AS 洗剤 ASA 感度 ASM 計画(4) B 細胞(3)
BBS 運動(2) BOT 方式(4) C 記号 C 型肝炎 C 言語 CA 貯蓄 CBU 爆
弾(2) CFE 条約(3) CP 制御(2) CR 生産 CVP 分析(2) D 警告 DI 勧

告 DD 原油 GG 石油 HA 抗原(4) IMF 借款 IMF 平価 J カープ効果
 KD 輸出 LL 教室 LL 牛乳 MOF 勘定(2) NR 住宅 OH 通信 PL 教団
 P-n 接合 POP 広告(3) POS 端末 PP 加工(2) PP 原則 PR 映画 PT 番
 組 R 因子 R 指定 RGB 信号 RH 因子 RSI 指数(2) S 状結腸 SAL 郵便
 SPF 動物 T 定規 T 尾翼 TNM 分類 UHV 送電 V 粒子

d 三字漢語

ABCD 包囲陣 AD 変換器(2) ATM 交換機 BT 殺虫剤 CGS 単位系(3)
 GDP 弾性値 P 型半導体 TI 委員会 TRU 廃棄物 VDT 症候群 X 線回折法
 X 線天文学 X-非効率 Y 染色体

II 和語付きのもの

A 型(4) U 字谷(2)

III 混種語付きのもの

この種のもは、大きく二つに分けられる。

- ① 通常の混種語で、すなわち異種の語基どうしが複合して名詞となるもの。

ABO 式血液型(4) ADR 銘柄

などがその例である。

② 前項成分のローマ字形態素を除いて、後項成分だけでも、異種の文字によって書かれたもの。混種語とは言えないが、混種の要素を含むものと見てよかろう。これには、

J カープ効果 FF 式ストープ

などの例がある。

IV カタカナ語付きのもの

A クラス(2) AE カメラ(3) AR モデル(3) ARGOS システム(6) BA
 レート(2) BL マーク(8) CFA プラン CV ケーブル D デ(4) DEW ライ
 ン DK グループ DM ガス EB ウイルス EP ホルモン F ナンバー FF 式ス
 トープ G コード(4) G パン GRAS リスト H アイアン H-I ロケット(3)
 HB プロセス HEPA フィルター HID ランプ HP シェル I フォーメーション
 (2) IC カード(2) IS バランス J リーグ JESSI プロジェクト JET プログ
 ラム LH テープ LP ガン MMR ワクチン MUSE デコーダー MX ミサイル
 OH レーダー(2) OHC エンジン P タイル PB リポート PS コンクリート
 PSP テスト PT ボート(2) Q レシオ QC サークル RE カー ROP カラー
 SDI サービス SRO ホテル T チューブ T バック T マン T メン TC ブラ
 ンド U ターン US スチール US ドララー UV フィルター V サイン V シネ

マ Vネック Vブロック VLIW プロセッサ VU メーター YA レーザー

以上は、「ローマ字を含む語」の形態について、後項成分の語種を基準にして、実際の用例を見ながら分けたものである。そこには、漢語を始め、和語、外来語、混種語などあらゆる種類の語が、大変自由に混合して使用されている。これを見ると、この種の語の多様な実態が、理解できるであろう。

また、語種の多様性に相応して、文字系列の面においても、前項成分にはローマ字を、後項成分には漢字、カタカナなどを使用するように、文字表記の複数併用がはっきりと特徴として現れている。

更に、語構成の面でも、元来の前項成分のローマ字語の構成の複雑さに加えて、後項成分の複合語に混種語のほか、複合語的、或いは混種語的としか言えないような、不完全な形をとるものが多く含まれている。また、前後両成分を総合すると、何層にも、複合語的、或いは混種語的な様相が観察される。

三. 後項成分の漢字要素とカタカナ語の形態と特徴

これまででは、ローマ字を含む語の形態について、主として後項成分と見られる語の語種を基準にして見てきた。その複雑さが既にご承知の通りである。次に、こうした語の構成要素の一部（後項成分）となる漢字要素とカタカナ語のみについて、造語上の形態と特徴を考察してみたい。

1. 漢字要素の形態と特徴

i 翻訳型

これは、前項成分のローマ字の略語につづく後項成分の漢字要素が、もとの外国語の語句の一部を翻訳語を以て、書き換えたものを言う。例は次のとおりである。（紙面の関係で、外国語は翻訳語の原語と思われる部分だけを括弧の中に示した。数字は用例数、無数字は1回を示す。以下同じ）

A 海域(sea area) AA 会議(conference) ABC 兵器(weapons 3) ABS 樹脂(resin) AD 変換器(converter 2) ADR 銘柄(stocks) AE 剤(agent) AM 放送(broadcasting 2) AND 回路(circuit 2) API 度(degree) AS 洗剤(detergent) ASM 計画(program) ATM 交換機(switching system) B 細胞(B-cell 3) BBS 運動(movement 2) BOT 方式(formula) BT 殺虫剤(insecticide) C 言語(language) CA 貯蓄(storage) CFE 条約(treaty 3) CGS 単位系(unit 3) CP 制御(control 2) CR 生産(production) CVP 分析(analysis 2) D 警告(notice) DI 勧告(recommendation) DD 原油(oil) FA 制(system 3) FEC 賞(award)

FMPT 計画(project 3) FT 工業株価指数(index 2) GDP 弾性値(elasticity 2)
 GG 石油(oil) GM 管(counter) H 型鋼(steel 3) HA 抗原(antigen 4) I/O 表
 (table) J カーブ効果(effect) K 点(ドイツ Punkt) KD 輸出(export) L 波
 (wave 3) LB 膜(film) LD 法(process) LL 牛乳(milk) MOF 勘定(account)
 MP 盤(record) MOF 集中相場(concentration rates) NR 数(number) O 脚(ド
 イツ Beine 2) OH 通信(rader) P 式血液型(blood group) P 点(point) P-n 接
 合(junction) POP 広告(advertising 3) POS 端末(terminal) PP 加工(finish)
 Q 熱(fever) PP 原則(principle) PS 方式(system) PT 番組(program) R 因子
 (factor) RGB 信号(signal) RRR 爆弾(bomb) S 波(ラテン undae) SAL 郵便
 (mail) SPF 動物(animal) TI 委員会(commission) TCA 回路(cycle) TNM
 分類(classification) TRU 廃棄物(waste) U 字谷(valley 2) V 粒子(particle)
 VDT 症候群(syndrome) W 杯(cup) X 軸(coordinate) X 線(ray) X 線回折
 法(analysis) X 線管(tube) X 線写真(photograph) X 染色体(chromosome 2)
 X 線天体(star) X 線天文学(astronomy) X 線療法(therapy) X- 非効率
 (inefficiency) XY 型(chromosome) Y 軸(axis)

前章で少し触れたが、「ローマ字を含む語」(289語)の中、形態上において「ローマ
 字+漢字要素」という構造をもつものは、全部で183語(延べ語数。以下同じ)もあ
 って、凡そ全体の6割を占めている。更に、この183語の中、上の例のような、原語の外国
 語の語句の一部に対する漢字翻訳語と見られるものは130語もあって、全体の凡そ7
 割近くを占めている。ここで言う漢字翻訳語は勿論原語の外国語に対するものであるが、
 その殆どは実は既製の漢語である。また、漢語の中でも、所謂二字漢語は183語中の77
 語で、全体の4割近くを占めている。これを漢字翻訳型の語の中で考えても、130語中
 の79語で、全体を占める二字漢語の割合は6割近くとなり、かなり高いものと言えよう。
 それは、二字漢語は、造語成分として高い結合力をもち、造語力が強く、短くて明確な
 意味が表せることなどによるものだと考えられる。二字漢語のほか「型」「制」「賞」
 「判」「体」「法」などのような一字漢語または接尾辞的な単漢字は、特定語の翻訳語と
 して使われ、定型化する傾向が見られる。また、三字漢語の場合は、「血液型」や「殺
 虫剤」のような、具体的で説明的な意味をもつ、使用率の高い熟語が使われている。七

漢語の翻訳語の形で「ローマ字を含む語」の後項成分によく使われる理由は、ローマ
 字語の構造にもよるものだと考えられる。ローマ字語は外国語の幾つかの単語の頭文字
 による省略によってできたものが多く、音素文字であるローマ字によって書かれている。
 そのため、語義指示力が非常に低く、語の普及には不適であると考えられる。そこで、

その一部を翻訳語という形で、表意文字である漢字に置き換えると、語義に関しては、大まかな範囲や分野を推察させる手掛かりとなる。また、日本語としてその形を整えようとする工夫もなされるため、語の普及にも役立つと思われる。これは勿論日本語の文字表記の多様性がある始めて実現できることで、問題解決のための良策だと言えよう。

ii 付加型

これは、原語となる外国語に対する完全省略語の形（iの部分省略に対して言う。）によってできたローマ字語の後に、語の意味や性質などを規定し、説明する漢字要素を付け加えて造られたものを言う。（語全体の様子を知るため、ローマ字語の原語となる外国語の部分は、全綴りで示すことにした。）例は次のとおり。

ABCD 包囲陣 (America, British Empire, China, Dutch East India) ASA 感度 (America Standards Association) CBR 兵器 (chemical biological and radioactive) CBU 爆弾 (cluster bomb unit) NOW 勘定 (negotiable order of withdrawal) PARCOR 方式 (partial correlation) PCR 法 (polymerase chain reaction) RH 因子 (rhesus) S 状結腸 (sigmoid) SD 法 (semantic differential) SSB 方式 (single side band) TARAN 方式 (test and repair as necessary) UHV 送電 (ultrahigh voltage) WW 加工 (wash and wear)

付加型の語は、翻訳型の語と比べると、前項成分のローマ字語が、省略語として完全形を取るか、部分形を取るかに違いが見られる。翻訳型の場合は、本来ローマ字省略語の一部となるべきところを漢字によって書き換えたものである。その部分形がローマ字語としての独立性を弱め、後項成分の漢字要素と切り離すと、意味をなさなくなる恐れがあると考えられるものである。これに対し、付加型の場合は、ローマ字語の部分が省略語としての完全形を取るため、それ自身が独立性をもっていて、後項の漢字要素がなくても、一つのまとまった意味を表し、また形もすっきりするとも言えるかもしれない。

こうした違いがあるにもかかわらず、後項に漢字要素を入れるのは、やはり形（iもiiも単純なローマ字略語より、語が長くなっていると言える）より語の意味の明確化を重視する傾向があるためではないかと考えられる。従って、これは、この種の語の造語上の主旨の一つとして見られるのではないかと思う。

八

iii 重複型

これは、原語となる外国語の一部を翻訳してできた後項成分としての漢字要素が、前項成分のローマ字語の一部と意味において重複するものを言う。その例は次のように示す（重複すると見られる部分と原語の対応部分下にアンダーラインを付した）。

GT 管 (glass tube) IMF 借款 (International Monetary Fund) LL 教室 (language

laboratory)

この種の語の前項のローマ字語は ii の付加型の場合と形態や特徴などにおいては、ほぼ同じだと見てよいが、両者には相違点もある。それは、iii の前項のローマ字語の語尾のローマ字が表す意味と、そのあとにくる翻訳語（英語 laboratory に対して、実験室や演習室、教室などの訳語があって、語形のゆれが見られるが、ここで、教室はその訳語の一つとみなす）と見られる漢語の意味とは同じで、両者の原語を探ると、同一語にたどりつく。しかし、ii の付加型の場合、後項の漢字要素の意味は、もとの外国語には含まれてははず、日本語に採り入れる際に、新たに付け加えられたものと言える。意味の重複を顧みず、このような語が造られた理由は、やはり意味優先、普及重視など、ii において触れた造語上の主旨によるのではないかと思う。

2. カタカナ語の形態と特徴

「ローマ字を含む語」の後項成分として用いられる漢字要素とカタカナ語には、文字体系の異なりによって現れた形態と特徴の両面で、共通点と相違点をもつ。ここで、後項のカタカナ語を中心に、用例に基づいて、その実態を考察していきたい。

α 転写型

後項成分のカタカナ語が、原語の外国語を書き換えてできた外来語であるものを言う。(外国語の部分は、対応語のみ括弧の中に入れ、数字は用例数を示すことにした) 例は次のとおり。

A クラス(class 2) AE カメラ(camera 3) AR モデル(model 3) ARGOS システム(system 6) BA レート(rate 2) BL マーク(mark 8) CV ケーブル(cable)
D デー(day 4) DK グループ(group) EB ウイルス(virus) EP ホルモン(hormone)
F ナンバー(number) HB プロセス(process) HEPA フィルター(filter 2)
HID ランプ(lamps) HP シェル(shell) I フォーメーション(formation 3)
IC カード(card 2) IS バランス(balance) ITF コード(code 3)
J リーグ(league) J-I ロケット(rocket) JESSI プロジェクト(project) JET プログラム(program)
LH テープ(tape) LP ガン(gun) MMR ワクチン(vaccine)
MUSE デコーダー(decoder) OH レーダー(radar 2) OHC エンジン(engine)
PB レポート(report) PS コンクリート(concrete) PSP テスト(test) Q レシオ(ratio)
QC サークル(circle) RE カー(car) ROP カラー(color) SDI サービス(service)
T チューブ(tube) T マン(man) T メン(men) U ターン(turn)
U ボート(ドイツ Boot) US スチール(steel) US グララー(dollar) V サイン(sign)
V ネック(neck) V ブロック(block) VLIW プロセッサ(processor)

VU メーター(meter) YAG レーザー(laser)

ローマ字を含む語(289語)の中、「ローマ字+カタカナ語」という構造をもつものは98語もあって、全体の3割強を占めている。これは、漢字要素の6割に次いで、二番目に多いが、この中で、転写型によって造られたと見られるものは、上に挙げたように、79語にものぼり、全体の8割を占める結果となっている。数字の上からも、1-iの翻訳型と同じ傾向が見られることが分かるが、それは、つまり一語の主たる意味内容を担う前項のローマ字語が省略語の不完全形(部分省略)となり、類概念を表す被修飾語の部分と見られる語が、カタカナによって書き換えられたものである。この場合、カタカナ語は、語義の方向性を示すものとして用いられるため、形の安定した、意味指示度合の高い、一般に広く普及している外来語を使っていて好ましいと考えられる。これもまた、今まで見てきたような造語上の主旨に合致するものと言えよう。

β 付加型

これは、形態的に1-iiの付加型と類似するもので、数は少ないが、その例を次に示そう。

CHAIN システム(Comprehensive Highway Automobile Information Network)

DEW ライン(Distant Early Warning) DM ガス(diphenylaminochloroarsine)

SRO ホテル(single-room occupancy) PT ボード(patrol torpedo)

付加型の場合は、原語に含まれていないものを新たに付け加えるため、付加語としてはできるだけ音節数の少ない、短いものを使うのが、語全体の安定を保つにはよい。ガスやホテルなどのような漢訳語のない、或いは普段、漢訳語(ガスには「瓦斯」という訳語があるが)を使わないものを除けば、「システム」を「制」に、「ライン」を「線」などのように、漢字書きのものにした方がよいかもしれない。

γ 転語型

カタカナ語が、原語の一部に対する音写によるものではなく、その一部の意味と類似する別のカタカナ語になっているものを言う。「替語型」と言ってもよいであろう。(交替すると思われる部分の下にアンダーラインを付した。数字は用例数を示す。)例は次のとおり。

H-I ロケット(H-I launch vehicle 2) FF 式ストーブ(forced flue type kerosene space heaters)

これも、語の意味を分かりやすくするための手段の一つとして見てよいであろう。

このほか、F ネット(network)のような「転写省略型」のものもある。また、G パン(jeans pants)のような「J」の発音を「G」に変えた、いわば「転音型」のものも見ら

れる。例は少ないが、こうした形態は、十分活用できるものとして見られるであろう。

以上、「ローマ字を含む語」について、語の構成要素の一部として用いられる漢字要素とカタカナ語の形態と特徴を、用例に基づいて考察してきた。その特徴は次のように要約できる。

(イ)後項要素の文字表記には、主に漢字とカタカナが用いられる。平仮名書きのものはないとは言えないが、今回の調査に使用した資料の中からは、例を見つけることはできなかった。

(ロ)「ローマ字+漢字」、「ローマ字+カタカナ」はこの種の語の文字表記の基本的パターンのように見えるが、「FF式ストープ」のような「ローマ字+漢字+カタカナ」の表記形態をもつものもあるため、多様性のあるものとして見るべきであろう。

(ハ)原語の外国語に対し、被修飾成分となるものは、できるだけ既製の漢語あるいは広く一般的に用いられている外来語を以て訳される。

(ニ)ローマ字語を可能なかぎり短くし、代わりに日本語の要素を採り入れる。これによって、語の安定を保ち、意味の理解を助ける。従って、漢字翻訳型とカタカナ転写型は各各の体系の中で最も多用され、二大形態として注目される。

終わりに

「ローマ字を含む語」は、今まで特に問題として取り上げられなかった。その議論のほとんどは、ローマ字のことを論じる際に、少し触れる程度のものであった。これは、ローマ字語は外国語由来で、専門的であり、それに少数であることなどの理由によるものだと考えられる。しかし、今回の考察を通じて、ローマ字ばかりでなく、ローマ字を造語要素として用いる「ローマ字を含む語」に実に複雑な様相のあることが分かった。そこには文字表記、語種、語構成などさまざまな問題が絡み合っている。従って、一元的なとらえかたでは論じ切れないものがある。

本稿が「ローマ字を含む語」という名称をもって考察を展開したのもこのためである。日本語は漢字やカタカナなど多様な文字体系を持つ言語であるが、ローマ字をも含めて外国語の受容にとって、比較的柔軟な構造を持つ言語である。この特徴は「ローマ字を含む語」の相においてもはっきりと現れている。文字の面では、日本語は他の如何なる言語より寛容的であるが、これは今日のような国際化時代においては、海外からの新技術の導入や新知識の吸収などに大いに役立つものと言えよう。しかし、それに伴うローマ字の無制限な増加は、日常的なコミュニケーションに支障を来すものと考えられ、慎重な対処が期待されるところである。

ローマ字語は漢字要素などを採り入れることは、外国語を日本語化する際の一つの工夫だと考えられる。勿論そのままの形では、完全な日本語化が実現できるとは思われないが、少なくともこの方法は、外国語を日本語にするための初歩的で有効な手段の一つとして見てよいであろう。

注

- ① 『国語学研究事典』(1977年 明治書院)による。
- ② 『コンサイス ABC 略語辞典』(1994年 三省堂)
- ③ ローマ字には「NHK」のような意味をなすものと「U」「V」などのような意味をなさないものがある。ここで、これらを含めて「ローマ字形態素」と呼ぶことにする。
- ④ ギリシャ文字を含む語は除外した。また、「富士銀行のスーパー MMC」のような語の後項成分はローマ字が来るものは、この辞典に収録されなかったため、今回は考察の対象外とした。
- ⑤ 後項成分は複合語的な場合、後項の被修飾語と見られる語の語種によって分類することにした。例えば、「FT 工業株価指数」の場合、「指数」の語種によって、漢語に分類することにした。

〔参考文献〕

辞典類

- 『国語学大辞典』(1980年 東京堂出版)
『国語学研究事典』(1977年 明治書院)
『日本語百科大事典』(1988年 大修館書店)
『コンサイス ABC 略語辞典』(1994年 三省堂)

著書

- 『語彙の研究と教育上・下』(玉村文郎 1984年 国立国語研究所)

雑誌類

- 『日本語学』(明治書院 1988, 10, Vol.7)
『言語』(大修館書店 1985, 9)